

六稜合氣会

「合気道と私」

——北野高校時代の出会いとその後——

氏名：安藤 勝利（111期）

1. 入部の動機

入部の動機は、一年次の同級生であった宮崎君に誘ってもらったことでした。私は北野高校への入学後器械体操部に所属していましたが、バック転をできるようになりたいとの目標を達成すると他の運動部も経験してみたいとの気持ちが生まれてきました。そして、その頃クラスの人気者でもあった宮崎君が私を誘ってくれたことから、一年次の秋ころ合気道部の門をたたきました。

2. 部活生活

練習が行われるのは昼休みと放課後でした。昼休みの練習へ参加するためにはお昼ごはんを急いで食べる必要がありましたが、私は食べるが遅いため、いわゆる早弁をした記憶もあります。日頃の練習は部員の計画に基づいて行われていましたが、高杉先輩を始めとする先輩方が指導にあたってくれる際にはより効果的な練習を行うことができました。

また、合気道部の部員は先輩とも後輩とも仲が良かったことから、高校生活での楽しいできごとから悩みごとの相談まで（一つ一つのできごとを直ちに思い出すことはできませんが）喜怒哀楽をともにすることができました。合気道部を通じて得たものとしては、今でも関係が続く仲間を得られたことだと言っても過言ではないと思います。特に同期の部員の多くは理科系であり、文理のクラス分けがなされた後は同じクラスになることもなかったことから、合気道部で活動を共にすることは私にとって貴重な接点でした。

3. 演武に向けての練習

日ごろの練習の集大成は、二年生時の演武において発表されることになっていました。私は山田君・高橋君と一緒に演目を組み、日々の練習にあたっていました。そして、練習の際には同じ演目を行った先輩方から丁寧な指導を受けることができました。演武の日取りが近づくにつれて、より真剣に練習に取り組んだことを思い出します。

このような日々の練習は、演武の本番においても十分に発揮できるものと信じて取り組んでいました。それだけに演武の場で発表できたことには大きな満足感を得ましたが、他方で、練習を重ねて体で覚えたはずの流れを、本番では完全に再現することはできず悔しい思いもしました。本番で満足のゆく結果を残すためには、その何倍もの練習が必要だということを身をもって痛感しました。

4. その後の交流

高校卒業後、私は東京に進学したため部員のみんなと日ごろ顔を合わせるという機会は少なくなりました。もっとも、部員のみんなが大学や大学院を卒業し働き始めるようになると関東で勤務を開始する人も多く、現在においては定期的集まることもできるので大変嬉しく思います。

5. 最後に

六稜合気会を通じて、合気道部という共通点をもった諸先輩方と幅広く交流できる機会を得ることができると同時に、高校時代の仲間と再び交流することができることから、今後もこの機会を大切にしたいです。

以 上